

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370240

研究課題名(和文)1950-60年代日本文学の英語訳に関する基礎的研究

研究課題名(英文)A Study on English Translation of Japanese Literature in the 1950s and 60s

研究代表者

榊原 理智 (Sakakibara, Richi)

早稲田大学・国際教養学術院・教授

研究者番号：00313825

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：1968年の川端康成のノーベル賞受賞は、日本近代文学が「世界文学」の仲間入りを果たした画期的な出来事であったが、そこに至るまでには占領期のGHQ検閲における翻訳に始まり、50年代の冷戦期の日米関係を反映した日本文学の英語翻訳ブーム等が存在していた。この共同研究は、こうした文学の翻訳のありようを文学的のみならず歴史的・社会的に多角的な方面から追求し、50年代においては、政治的・商業的な状況に配慮しようとする出版人と、その意図と交渉を続けつつ翻訳作品を選択し翻訳する翻訳者たちのせめぎ合いが存在したことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Kawabata Yasunari's winning of the Nobel Prize in Literature in 1968 was a symbolic event that Modern Japanese Literature became part of the World Literature. Needless to say, translation played a crucial role in this event. When we look at the process up to this event, however, we see twists and turns. During the occupation period, translation was used in GHQ censorship to control Japanese. In the 50s, translation of Japanese Literature increased dramatically to promote US Cold War Scheme. Our project made clear that translation occur within the complex negotiations of translators with the publishers and editors who had their own political and commercial agenda.

研究分野：戦後特に占領期における日本文学、文学理論、翻訳論

キーワード：50年代60年代 日本文学 英語訳 国際情報交換 冷戦期

1. 研究開始当初の背景

(1) 2020年東京オリンピック決定以降、50年前の1964年に開催された東京オリンピックに光が当てられることが多くなった。ノーベル文学賞もまた、日本人で3番目の受賞者への期待が高まると同時に、約半世紀前の最初の受賞に至るまでの過程に関心が寄せられている。それは、選考の記録が50年後に公開されるためである。川端康成が日本における最初のノーベル賞を受賞したのが1968年。従って、その選考理由が公開されるのは、3年後の2019年1月である。今後、50年前の世界で日本文学がどのように捉えられていたかという記憶が呼び起こされてくるだろう。ノーベル賞の選考過程を考察することは、半世紀前の日本文学がどのような紆余曲折を経てノーベル賞を受賞するに至ったかを解明できるだけでなく、世界文学の中の日本文学の位置を探る1つの方途となるであろう。

(2) そのための一つの重要な要素は、翻訳である。英語訳が出なければ、ノーベル賞の選考にあがることすらできない。世界文学とは、畢竟英語に翻訳された文学のことだからである。50年代は、日本文学の英語訳ブームであった。敗戦・占領期を経て、日本の文学がその存在を英語圏、特に旧敵国であるアメリカ合衆国に流通していく過程を見ることは、(1)にあげた川端のノーベル文学賞受賞に至る道筋を総合的・歴史的に解明することと直結する。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、1945年から1960年代にかけて、日本の近代文学が世界のいわゆる「主要な文学」となっていく過程を、英語への翻訳の生産・出版・流通に焦点をあてながら、歴史的かつ理論的に研究することを目的としていた。

(2) 日本の近代文学が世界文学の仲間入りをしたことを確定づける出来事は、言うまでもなく1968年における川端康成のノーベル文学賞受賞だが、そこに至るまでには、1940年代後半の占領期の日米関係があり、50年代における日本文学の英語圏での翻訳ブームがあった。本研究では具体的なノーベル賞の査読過程を明らかにするとどまらず、そこにいたる敗戦・占領期から冷戦期に至る日米関係と日本文学の翻訳とのつながりを精査することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 資料収集 文学研究において、作家についてはさまざまな方面から光が当てられ、実証的な研究が進んでいるが、翻訳者については実証的な研究はまだ緒についたばかりである。翻訳作品が実際にどのように誰によって選ばれ、決定されていったのかといった翻

訳過程に関する研究において、資料の地道な発掘は不可欠である。資料のほとんどは、個人的な書簡であると考えられ、書き手が著名な作家ではないため、保管されているかどうか不明である。そのため、予備調査を日本で行い、実際に現地に出かけて資料収集にあたった。

(2) 海外研究者との意見交換 日本における翻訳研究は、特に翻訳理論において諸外国に遅れを取っている。そのため、特に翻訳研究の第一線にある米国の研究者は、自身が翻訳者であることも多く、理論に加えて実践からくる知見を持っているため、彼らとの意見交換が必須であると考えた。

(3) 翻訳テキストの分析 実際にどのように翻訳者が行動し選択したのかという実証的な研究のほかに、重要なものとして具体的に翻訳されたテキストを分析するという作業がこの研究には不可欠である。もとの原文と英語文を照らし合わせることによって、どのような改変を翻訳者が加えたのかを明らかにし、それらがテキスト全体の印象をどのように左右したのかを考察する必要がある。

(4) メディア論的分析 小説や詩といった文学作品の翻訳テキストを分析することはもちろんだが、それだけでなくこれらが発表された形態に注目することは、翻訳という「出来事」が発生するための条件を見るうえで不可欠である。特に雑誌等に発表された作品は、雑誌全体の作りを見ることによってしか、その役割を正確に把握できない。

4. 研究成果

(1) スウェーデン・アカデミーへの予備調査 特に一年目においては、ノーベル賞の選考過程をつまびらかにすることを目的に、研究協力者である読売新聞東京本社の待田晋哉文化記者がノーベル図書館訪問を実施した。情報開示請求によって得られた新事実として重要なものに以下の二点があった。まず、選考に先立つ1963年の時点においては、三島由紀夫が日本人候補者の中でもっとも受賞の可能性があったこと、次にその具体的な選考の過程のなかに、三島由紀夫『宴のあと』を翻訳したドナルド・キーン英語訳に関する記述があり、英語訳が選考過程に重大な影響を与えていることである。これらは待田記者の署名記事として読売新聞に発表されたほか、『読売新聞』2014年1月28日朝刊12版)その学術的考察として、十重田が「ノーベル文学賞 60年代の選考—三島、日本人候補の最有力(『読売新聞』2014年1月28日朝刊12版)にまとめた。

(2) 国際ワークショップ 2014年度には、国内外からゲストを招き、「〈世界〉を通して見る日本文学・日本文学研究」と題した国際ワ

ークショップを開催した(2014年7月29日、於早稲田大学文学学術院戸山キャンパス 33号館第一会議室)。このワークショップでは、海外からカリフォルニア大学ロサンゼルス校のマイケル・エメリック上級准教授、国内から上智大学の河野至恩准教授を登壇者として招き、研究代表者の榊原、研究分担者のキャンベル・十重田・塩野の全員が参加し公開での討論を行った。

主な論点としては、(1) 米国における日本研究の位置づけやその推移に関する問題点について、(2) 「世界の読者に向けた日本文学／日本文学研究」と言った場合の「世界」の捉え方とその政治性について、(3) 1950年代以降現在に至るまでの翻訳出版状況に対する評価と問題点について、等々が提起され、参加者間でそれぞれ活発な議論が交わされた。当日は一般に公開したこともあって、学内外を問わず留学生や出版・翻訳関係者が多く参加し盛況となった。また、ワークショップ後には、ここで提示された意見を踏まえながら今後の研究計画内容とその方針について検討する研究会議を実施した。

(3) 書籍『検閲の帝国』所収論文 この書籍に所収された十重田・榊原論文は、40年代後半の占領期の検閲と小説をそれぞれ扱っており、時期は50年代より遡るが、どちらも翻訳に深い関係を持つ論文であり、50年代の翻訳黄金時代を考える上で重要な連続性を示すものである。十重田論文は、横光利一『上海』を検討するにあたって、これまであまり注意の払われてこなかった戦前・戦中の内務省と、戦後のアメリカ軍占領下GHQ/SCAPによる、二つの異なる検閲との関連から検討を加え、この小説における改稿の重要性を明らかにした。一方、榊原論文は、武田泰淳の占領期の小説における翻訳の表象を考察したものであり、翻訳の実証研究というよりも理論研究に近いものである。占領期において、翻訳者の登場する小説は相当数にのぼっているが、今まであまりそうした小説に光が当てられることはなかった。武田泰淳は、敗戦を上海という特殊な国際都市で過ごした作家であり、日本の占領においても他とは異なる視点をもって翻訳に関して考えていたと思われ、榊原論文はその特殊性について考察している。

(4) ドナルド・キーンセンターでの資料収集 ドナルド・キーンは50年代の翻訳黄金時代を築いた翻訳者のうちの一人である。特に、キーンは、1954年にAnthology of Japanese Literature from the Earliest Era to Mid-Nineteenth Century (グローブ社)を編み、また1956年にその続編としてModern Japanese Literature: An Anthologyが同じくグローブ社から発行されている。前者は古代から現代を網羅した抄訳集、後者は日本近代文学を中心に編んだものであり、日本に

「文学」なるものが歴史的に存在することを英語圏に示した重要な業績である。むしろ、それ以前にも日本文学の翻訳は存在していたが、それらはどちらかと言えば単発的・偶発的なものであった。しかしこの分厚い選集は、日本にも「文学」とりわけ「近代文学」が存在していることを、英語圏の読者に積極的に示したのである。また、1955年にキーンはJapanese Literature: An Introduction for Western Readersを出版しており、これは選集の解説書として機能している。この選集が、どういう意図を持って編まれ、またどのような選考過程を経てつくられたのかを見ることは、50年代における「日本」がどのように表象されたのかについて我々に知見を与えてくれると思われる。したがって、我々は2014年度～2015年度にかけて、米国コロンビア大学図書館所蔵のドナルドキーンコレクションの調査を実施した。この調査では、ドナルド・キーンと日本国内作家(および周辺関係者)間で交わされた1950年代～60年代までの書簡を中心に資料収集を行い、研究基礎資料となるデータ作成を進めた。該当資料数が多かったこともあり、このデータ作成作業自体は未だ完成には至っていないが、その作業過程ではいくつかの重要な資料を確認することができた。例えば、特定の作家が文学全集をめぐる翻訳の役割について頻繁に具体的な注文をつけている資料等は、当時の翻訳出版を考える上では貴重な発言となることから、現在も分析を継続させている。

(5) チュラロンコン大学国際シンポジウム参加 先述したように、ドナルド・キーンは翻訳黄金時代の立役者の一人であったが、もう一人はエドワード・サイデンステッカーであった。彼は、Knopf社の編集顧問であったHarold Straussとともに、日本近代文学に特化した叢書を企画している。キーンのアソロジーのほとんどが抄訳であったのに対し、この企画は全訳して単行本化するというものであり、また、過去の日本ではなく、その現代性を強調する時宜にかなった作品が選択されているのが特徴的である。その成果が、1954年における大佛次郎『帰郷』、55年の谷崎潤一郎『蓼食う虫』、56年の川端康成『雪国』、57年の大岡昇平『野火』、59年の三島由紀夫『金閣寺』等の全訳である。川端・谷崎・三島は、60年代を通じてノーベル賞の選考過程に名前が挙げられており、69年の川端の受賞に直結することになるから、この叢書の果たした役割は大きいと言えよう。チュラロンコン大学での榊原の発表は、サイデンステッカーが関わったもう一つの企画についてのものである。サイデンステッカーは、Atlantic Monthlyというアメリカの老舗総合雑誌の別冊として日本特集を出すことに積極的に関わった。さらにこの雑誌は、ニューディレクションズ社という出版社を率いる

ジェームズ・ラフリンという出版人が作ったインターカルチュラル社という非営利法人によって統括されており、この法人は冷戦期のアメリカの文化戦略に深く関わったフォード財団の出資によって設立されている。榊原の発表は、この雑誌全体がアメリカの文化戦略の一部であることを示すとともに、それがこのなかによく含まれる日本文学の翻訳作品の選択にも影響していることを明らかにした。

(7)『谷崎潤一郎読本』所収論文 榊原は上記の Atlantic Monthly 誌に所収された谷崎潤一郎『陰翳礼讃』の抄訳を原文と照らし合わせて分析し、サイデンステッカーがそこに加えた改変について考察をした。「文学」は冷戦期アメリカの重要な武器であったが、谷崎のこの文章は、文学を特殊な位置においており、その位置がアメリカ側の推進したいものに酷似していたために、あえて選択され翻訳されたことが明らかになった。

(6)今後の展望

3年間の研究により、川端康成のノーベル文学賞受賞を頂点とする日本文学の「世界化」は、40年代50年代を通して長期的に研究することで冷戦期の日米関係と深く関わっていることが明らかになった。また、翻訳者たちの社会的・政治的な立場によって、翻訳される作品の選択が行われ、翻訳作品のみならずその周辺環境を精査することがこのような研究において不可欠であることが改めて確認された。同時に課題も明らかになった。先述したように翻訳者や出版社に関する資料は、有名作家の書簡等と異なり、発掘の過程自体に時間がかかる。米国での長期間の調査が今後は必要になるであろう。翻訳に関するこのような実証的研究は、まだまだ発展過程にある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

十重田裕一「せめぎ合う占領期事前検閲と改造車文芸出版——一九四五-四六年 横光利一『旅愁』を中心に」、『日本文学』、査読有、2015年、第749巻、pp. 54-64

[学会発表] (計2件)

榊原理智 “Politics of ‘Cultural Exchange’: Representation of Japan Under the Cold War Scheme”, 2016年7月2日発表予定、於国際基督教大学

榊原理智「翻訳の政治学——1950年代日本文学の英語訳をめぐる」、2014年8月26日、タイ国日本研究国際シンポジウム2014、於タイ・チュラロンコン大学

[図書] (計3件)

榊原理智「谷崎の現在地——翻訳のポリテクストと『陰翳礼讃』、『谷崎潤一郎読本』、翰林書房、2016年10月刊行予定

榊原理智「移動と翻訳——占領期小説の諸相」、紅野謙介・高榮蘭他編『検閲の帝国——文化の統制と再生産』、新曜社、2014年4月

十重田裕一「植民地を描いた小説と日本における二つの検閲——横光利一『上海』をめぐる言論統制と創作の葛藤」、紅野謙介・高榮蘭他編『検閲の帝国——文化の統制と再生産』、新曜社、2014年4月

[その他]

十重田裕一、ロバート・キャンベル、木内昇、児玉竜一、藤野裕子「座談会 浅草を語る」、『文学』岩波書店、2013年7-8月、第14巻第4号、pp. 2-35

待田晋哉「ノーベル文学賞60年代の選考三島、日本人候補の最有力」、『読売新聞』、査読無、2014年1月28日朝刊12版、p. 19-19

十重田裕一「(寄稿) ノーベル文学賞60年代の選考 三島、日本人候補の最有力」、『読売新聞』、2014年1月28日朝刊12版、p. 19-19

国際ワークショップ

榊原理智、十重田裕一、ロバート・キャンベル、塩野加織、河野至恩、マイケル・エメリック、「〈世界〉を通して見る日本文学・日本文学研究」、2014年7月29日、於早稲田大学文学学術院戸山キャンパス 33号館第一会議室

6. 研究組織

(1) 研究代表者 榊原理智 (Sakakibara Richi) 早稲田大学国際教養学術院 教授
研究者番号: 00313825

(2) 研究分担者 十重田裕一 (Toeda Hirokazu) 早稲田大学文学学術院 教授
研究者番号: 40237053

(3) 研究分担者 キャンベル ロバート (Robert Cambell) 東京大学・総合文化研究科 教授
研究者番号: 50210844

(4) 研究分担者 塩野加織 (Shiono Kaori)

早稲田大学文学学術院 助教
研究者番号： 80647280